

人類は何度、奇跡を願っただろう。



#2

小説  
朝霧カフカ

イラストレーター  
鳥羽雨

メカニックデザイン  
貞松龍彦

前号より

人類は何度、奇跡を願っただろう。――  
第1巻・第2巻の物語は、2011年3月11日の東日本大震災を背景に、被災地で行われたボランティア活動を通して、被災者たちの苦しみと希望を描いた。そして、被災地を訪れたボランティアたちの心の変化を描いた。――

ヤンマガchにて  
朝霧カフカスペシャルインタビュー動画を  
記憶中!!

急激に陽光が遠のいていった。

同色の空の光にかわって、闇とオレンジ色の光が車を包んだ。ナトリウムランプの照明塔が、車内を流れるように注ぎこんでいる。

誰も車内にはいない。

「に……逃げ切った……」

ため息のように聲が聴えた。自分の声だった。

遠くのない車内は、トンネル内部には、照明の他には、他の車の影もなかった。

彼方を振り返ると、道路はトンネル入口で狭い。照明をあげていた。車長がシートベルトを解く動作では、トンネルに頭を突っ込むので横一列らしい。無理に入れれば折れが引かかって車動きが取れなくなるのだらう。

「はあ……」 南雲さんが支那のため息をついた。

彼は濡れたような顔に重いた。顔の汗が冷た

い。あれが「敵」。人間を捕はそうとするもの。

ようやく真顔が通いついてきた。あれと絶対するといふこと。その深刻さと現実を見る。

あれは生物じゃない。

いくら力が強かろうと凶暴だろうと、生物であれば本能がある。食料を求めたり同族をすつたり外敵を排除したり。牙も爪も凶暴さなり、そういう生存本能にしがたがって振るわれる。肉食獣でも昆虫でも、人間を襲うのには理由があり目的がありルミがある。

けどあいつは違った。あいつが人を襲うのに目的

なんてない。ただ、さうして、あるから襲うのだ。

そうだ。あうく動き出すところだった。南雲さんが言うには、あいつは人間を捕はすために月を導くとそうしたのだ。そんなことをすれば地球は砕け散って宇宙の塵になるし、地球がなくなつた後で

「敵」が、じゃあ火星に集合。なんて言ってる。宇宙をすいすい泳いでいるはずがない。「敵」も滅びる。そんなのは分かってきつたことだ。

それとも月を引かずして落とそうとした。人間を滅ぼすために。

あれは生物じゃない。肉體を導いた、1000パーセント純粋な殺意の塊だ。

「ニイナ、大丈夫？」

南雲さんが、助手席のニイナに気遣ひのげな表情で尋ねた。

けれどニイナからは返答がない。

「ニイナ」

「黙って」

ニイナは押し黙した声で言った。顔を動かして助手席のほうを見ると、ニイナは口先を汗手で押さえて、うつむいていた。浅く早い呼吸音が聞こえる。

彼女は震えていた。

張り詰めた空のように全身を緊張させ、震えを止めようと顔を食いしばっていた。右手を口元に置き、左手はドアのインナーハンドルを強く握りしめていた。

何が言葉をかけるべきなのだろうか。

「何も言わないで」ニイナが言った。その声は低い。ようやくく聞き取っていた。

「……ニイナは「敵」の言葉で「人間を亡くした」。

その時に自分も手錠を失って、だから「南雲さんが女であるような口調で言った。」「ニイナ、仕方ないわよ、そうすくでは……」

「黙ってて、聞いてんでは……」

ニイナが力任せに叫んだ。その拍子にニイナが握っていた車のドアハンドルが動き出して、視界からも散らされた。

「殺してやるんだから……放らさ、一匹狼らず、この新しい顔で」ニイナは震える声で言いながら、もが散られたドアハンドルを握りしめた。金属芯のドアハンドルは、壊された折り紙のようにニイナの手の中でぐしゃぐしゃになった。

「そのつもりなのに……」喉が詰まって、悲痛も出なくて……」

ニイナは自分の唇に唇をうずめながら嘆息、それきり黙った。

誰も何も言わない。車の騒動音と、割れたガラスから吹き込む風切り音だけが車内を満たした。

「あいつが市街に行く前に、本部の機動部隊に出動要請しないと」南雲さんが重い口調で言った。「でも……あれだけ大物の（侵入者）」を相手に、撃退できるだけの火力が、本部にあるかどうか……」

「撃退できなかったら、どうなるんです？」不安にかられて、彼は思わず訊ねた。

南雲さんは顔を離れて、彼のほうを見てゆっくり顔を横に振った。

つまり、そういうことなのだ。僕にはそれ以上を尋ねる勇氣はなかった。

僕はとは何としか解の基盤から逃れたが、このまま

親がおとなしく帰っていくとは思えない。ここから  
有物まではそう遠くない。もし彼がその気なら、ほ  
んの数分で人々が暮らす街まで通り抜けるだろう。

おそく、こういう事態は、今この街で初めて起こ  
ったことではないのだろう。いろんな国、いろんな  
地域で何度も繰り返されてきた。戦力不足と戦意、  
そして戦意。

南軍さんは自分のホムスターから戦意を取り出し  
て目の前に掲げ、残念そうに眺めた。

「もし敵は主なら、こんなちっぽけな軍隊一丁で  
も、あの戦意をやっつけられるのに」消え入りそう  
な声で南軍さんがつぶやいた。そこには隠しきれな  
い本音のこぼれがあった。「牧師さんが本道にいてく  
れたら……」

「南軍、やめて」ニイナが弱かな声で南軍の肩で南軍  
さんを見つめて、南軍さんは堪えず続けた。

「知ってる？ M、Mの下士官の同じで、  
『世界最悪の牧師』はどうやって敵を倒したのか」ッ  
というやうな顔が浮かび上がっている。もちろん南軍内陣  
陣は黙したから、こっぴどくたぐい、南軍さんは唯  
い雲間を覗きそうとするように、顔を雲間の形に  
して置いた。「笑えぬとね、そんなの確かな方法  
なんてないのに。おと神代君、どう思う？」

彼は少し悩んでから答えた。

「分かりますけど……南軍、彼に見えない真剣が  
使われたんじゃないんですか？」

月を照らす顔があるような世界だ。どんな奇妙な  
兵器があつたって不思議じゃない。

「それが通うらしいの。映像や敵の光線を科学者が  
どれほど精密に解析しても、特別な兵器による攻撃

の開始は確認されなかったそうよ。おかげで下士官  
の陣は失決、陣は金に断れぬが一方ですッ  
て」

南軍さんはどこか諦めを失った表情を見せて、彼  
に笑いかけて言った。

「あーあ、もし神代君がその『世界最悪の牧師』に  
当たったら、私たちその陣は金に断れぬで太極拳なの  
に……」

その場を明るくする冗談だったことは間違いない。  
けれど南軍さんが思いつきで口にしたそのお調  
子が、目に見えない何かにかつんと当たったような感  
があった。その直まではっきり聞かされたようだった。

「神代君は幸運の便乗者。きっと良いことを得て  
込んでくれるわ。」

たぶん、軍内にいる三人はそのとき、同じことを  
考えていたと推測。

「……ねえ、神代君、それってどう思う？」

南軍さんの言葉には、半信半疑で言葉を返さうな  
表情があった。

「それって……何です？」

「だから、牧師さんのこと。牧師さんは民間人の少年だ  
ったそうよ。牧師さんが、大層下、ゆめと夢を消し  
たっていうのも、記憶喪失だったから説明がつくし」

「まさか」

彼は軽く笑って決するようにならなくなった。そう  
すればそれは冗談になると思つたのだ。軍内の雰囲気  
を少し明るくしたあと、そうよね、とこで……

という風に次の話題に移けたと思つた。そうなるはず  
だった。

でも、そうはならなかった。

「神代君、自分が誰か知りたいたいと思わない？」

「南軍」ニイナがもう一度強めのある声で言った。

南軍さんは、そんなニイナの口調に堪えず言葉を  
続けた。「もし君が牧師主なら、その悩みはまるッ  
と解決よ。そのうえ、あのほかでかいハリネズミだ  
って今聞けるかもしれない。それだけじゃない、  
人間はあと三年生きたら死んで置かれてるけど……牧  
師さんが、戻ってきてくれたら……」

たぶん南軍さんは、冗談で言っていた。あるいは  
冗談で置いているように、彼たちに思わせようとし  
た。でもその試みはうまくいってなかった。

「通います」と彼は言った。「そう思ってもある  
のは決まらずけど、僕はその牧師主とかいうのが、  
どうやって敵をやっつけたのか想像もつきません。  
さっき怪物に倒れた時だって、憶えておめく他  
に、何も思いつかなかった」

彼には誰か知らない。本道になんの力もない。

もし彼がその牧師主とかいう奴なら、何の武器も  
不思議な力もなく敵を倒せたなら、自分でもやり  
方くらい分かってもらいたいはずだ。たとえ記憶がなか  
ったとしても、ちっぽけとした感覚や、引き金となる  
動きくらいは体で覚えていたって不思議じゃない。

けれど内面を覗きまてでもなく、彼にはそんなもの  
はなかった。さっきも状況に翻弄された。ただ車のシ  
ートにしがみついていただけだ。

でも、南軍さんはそうは思っていない。

「けど……」

「いい加減にして南軍」びしゃりとほわつてるよう  
に、ついにニイナが退場した。



「教習生なんて二度と口にしないうで、教習生なんて、どっかの政体が考えた作り話でしょ？」

「でもニイナ、考えたことない？」南無さんは食い下がった。「もし教習生が現れたら、って。もし明日にでも戦争が勃発したら、僕に『南無さん！』に起てられることはないし、カレンダーに来年の予定を隠し見持ち立てすることもない。ご両親からもらったその手足に、毎週戦闘教習メナナンスすることもないよ」

「南無、さっきから、ライン、を避けてる。ニイナはどのように言った、その確に近頃脱走術の夢りが押し込められていた。『もういつぱいパパとママの故を出したら、二度と口開かないって——それが、』」

「一晩、だって、前に決めたはず」けれど南無さんは引かなかった。真剣な口調でニイナに語りかける。

「ねえニイナ、ご両親が生きてたも、あなたを想像な場所に残さずたくないって言うはずよ。戦場になんて行かずに、もっと普通で、支の手をしく……」  
「ふざけないで」ニイナが机裏に助拳のダッシュボードを叩いた。ものすごい音がして、車体が少しバウンドした。「親のつもりで脱走しても、全部南無の自己満足！ 特務保護官はパパやママじゃな

い！ 特務保護官はわたくしを（ギルド）を、保護すんのが仕事でしょ？」

「……」南無さんが鼻を嗅いふんだ。その表情がこわばった。踏み越えられたくない。ラインを、今度はニイナが踏み越えたようだった。

いつの間にかトンネルが終わるうとしていた。同く光る平内形の出口に向かって、車は一箇所に進入していく。

空の白い光が車体の中に入通する。

トンネルが終わり、僕たちを乗せた車が空の下に姿をさらした。

その直後、車はぐちゃぐちゃに潰れて横向きに倒んでいた。

天井が下になり、床が上になった。黒甲冑がシートベルトに食い込んでみしりと音を立てた。

何が起ったのか分からない。頭が真っ白になった。分かるのは、トンネルを出た瞬間、地球が車の横腹におちたような衝撃に襲われたことだけ。

車体が倒れた。ぐるぐる回る外の景色に、一瞬、巨大な眼の姿が見えた。

窓は割れず割れて破片が舞っていた。車内はほと

んど「くの字」に折れ曲がり、車輪は通常の半分くらいに縮んでいた。内面が体のいたる所を殴りつけた。

ようやく状況に認識が追いついた。僕はトンネル横の山奥を通過してきていたのだ。そしてトンネルから出た車に、巨大な前扉で横断道の壁打ちをくらわせた。

車内は揺さぶられて鋭めの放物線を描いていた。横は地面に暴発する衝撃を手放して体を強くした。これだけの勢いで地面に激突すれば、無難それ

だけで死ぬ可能性もある。

地面には激突しなかった。もっと進かった。車両は溝底を駆け、崖から落下しはじめたのだ。

「南無さん！」

顔をなぞるように自由落下していく乗用車の中で、僕は運転席に向かって叫んだ。背中めどこが熱い。ひどく怪我をしているのかもしれない。だが

高みが臨に到達するまでまだ少し時間があろうから、とにかく車を動かさなくては。車ごと崖下に叩き付けられれば、即死は免れない。

運転席の南無さんが見えた。顔から血を流して気を失っている。車が回転するたび、シートベルトに支えられていない南無さんの頭がぐんぐんと不

空をそうに飛べた。気絶しているのか、それとも

ニイナの無事を確かめたいけれど、彼の位置からは見えない。

どうすればいい？ ニイナも、気絶した南雲さんを助け、この落下する車の中からの脱出するには、どうすれば――

混乱のなかで両腕を見張った僕に、さらなる絶望が襲いかかった。全身が凍り立った。

「敵」が、(大天狗)が扉を筆直に走っている。この車を逃げてきているのだ。敵陣と共に大口を開ける。空を飛ぶ牙がざらりと光る。

何なんだ、こいつは一体何なんだ。

扉に降られたような恐怖が走った。車を逃げてきてから降り、そこから降り、その上でさらに僕たちを食い殺すべく迫ってくる。この「敵」とかいう存在は一体何なんだ。何故そうまでして人間を殺そうとする？

「奴が来る！ 逃げないよ！」僕は叫んだ。

逃げられるわけがない。ここは自動運転する車の中で。

窓の口が閉ざし通る。降りたする確かしく強

硬な壁が、車内を覆う地獄の門となつて開かれる。巨大な腕の牙が車内の外装をタツキ一翼のよう

に貫き、車内を上下から噛み潰した。

「でもニイナ、考えたことない？ 城主王が現れて、明日にでも戦争が始まったら、って」と南雲さんが言った。

「え？」

僕は思わず大声をあげて飛び上がった。

南雲さんがきょとんとして僕を見た。

「――神代道？ どうしたの？」

「あいつは？ 誰は？」僕は窓に張り付いた。

車はトンネルの内側を走っている。闇の中を走る二列の橙黄色のライトが、空中の道のように前方へ照らしている。

僕は車内を見渡した。湧いていない。牙が貫通してもしない。南雲さんもニイナも無事だ。

何が起きた？

つい今まで、僕は道を駆け走っていたはずだ。胃、衝動、痛み、そして暴風雨のような感覚。

「次は次？ もうすぐトンネルを抜けろわ。そうしたら――」

車はトンネルの出口にさしかかろうとしていた。全身が電流を流されたように跳ねた。

「駄目です！」

「きやっけ」

まともに思考する余裕もないまま、ハンドルを持つ南雲さんの腕を強く握り込んで引く張った。驚いた南雲さんがハンドルを急に握り、車体が傾向きに流れる。車は進行方向に右側を見せるように斜めになつて速度を落とすした。

「ちよっとちよっと――危な――」

南雲さんが叫び終わらないうちに、巨大な翼が眼前を通り過ぎた。

車のすぐ前、トンネル出口のほんの数メートル先の空間を黒い塊が傾向きに滑いだ。それは何もない空を駆け抜け、路上に三葉の長い爪痕を残した。

車は無事だ。風圧にあおられて脱けしなからも、南雲さんはハンドルを左右に切つて制御を取り戻し、トンネルを抜けた。

「今の何？」南雲さんが叫んだ。

風が来る。トンネルの出口前に着地した寒風が、こちらを振り運るところだ。必殺の一撃を放たれて、六つの紅蓮が情しみに染まっている。

南雲さんは道とんだ反動でアクセルを踏み込んでいた。車体が加速し、怪物との距離が縮まってくる。山風の隙にみえ、天狗足は見えなくなつた。けれどすぐまたやってくるだろう。

「ねえ神代道、覚えて！ 今どうやって敵の攻撃を避けたの？」

「分かりません……さっと偶然です！」僕は答えた。さっきの感覚、車を攻撃されるに選

いらないという感覚は、今はもうはるか遠くに後退していた。車を振り回した時の恐怖も、今では何日もの夢のこのように曖昧だ。

「偶然じゃないわ」南雲さんが確信に満ちた声で言

った。「神代道がいなかったら、さっきの攻撃は絶対当たってた。偶然じゃない。何かが起ったのよ。神代道自身を自分からしないような例が――」

僕は反論しようとして黙った。今の南雲さんを誘導する言葉なんて思いつかなかった。それだけその言葉には強く信じを置きがあった。

「ずっと想像してきたわ」南雲さんがハンドルを握りしめて言った。「敵は私がいつか目の前に現れる日のこと。その時、私には何ができるんだらうって、ずっと考えてた」

「やめてください南雲さん、僕は通うんです」



「神代君が悪い出してないだけじゃないか？」

僕は画面に睨まった。確か、僕が記憶喪失である以上、かつての自分が何をしていたことができる人間だったのか、確かめる方法はない。

でもそれは過度の不在証明だ。「教団主ではないことを証明できない」からといって、僕が教団主であるということにはならない。第一、偶然運で拾った記憶喪失の少年が教団主だったなんて、それだけの確率で起こりうるっていうんだ？」

「そんなのあいつから逃げ切つてから考えりゃいいでしょうが」ニナが車庫中央のコンクリート地面を叩き出しながら口を執んだ。「間違、この先に並走リニアール・カノンの乗道場があるわ。あの列車は最高速度250キロ出るし、あれに乗ればいっつも逃げないかも」

「私もそれは考えたわ」南宮さんは首を傾げて言った。「でも……あの列車は最高速度になるまでに微妙かかると。その前に逃げ付かれちゃう。このまま運で逃げ切るしか」

「でも、これから先はどのくらい山間の旅行路よ？ さっきの積みみたいな車輪でもなさや、あいつに逃げ付かれるんじゃないの？」

南宮さんは厳しい顔をしながら答えた。南

宮さんの目の奥を、汗が一筋すべり落ちた。

「神代君……さっきの駅、どうやってやったか思い出せない？」駅り出すような声で、南宮さんが言った。

僕もずっとそれを考えていた。南宮さんの言う通り、僕がその教団主だった、この列車を切り抜けることもできるかもしれない。けれど……

「無理です」僕は首を横に振った。「さっきの感覚が思い出せないんです。本当に僕が何かをしたのかも」

「……分かったわ」

南宮さんは厳しい表情でアタセキを踏み込んだ。車は走行する道を高速で駆け抜けていく。

背後から大地を踏み割る地震りが聞こえてきた。駅が通ってきているのだ。タイムリミットが近い。

そうこうするうちに、丘の向こうの景色が開けた。ニナが言っていたリニアール・カノンの、最高速、らしい列車場が遠くに見えてきた。

それは一見したところ、ごく普通の列車場のような構造だった。丘の麓に沿って列車軌道があり、はるか遠くまで続いている。建物も音が低く、分厚い壁に覆われている。

列車場に似ているとは言っても、普通の駅でないことはひと目で分かった。たゞは改札がないこと

る。列車車両が軌道と地面に埋まっているところ。そして列車の前後の上に、戦車の機身のような長大な砲台が設置されているところだ。列車砲というやつだ。

敵の軍勢の懸念には、この列車が戦車まで自走し、砲を攻撃できるのだらう。列車が砲台に埋まっているせいで、外からは砲台の上に乗り込み、その上に長大な砲台がよきまきり出しているように見える。

敵出現の緊急信号を受領したためだらう。列車砲はいつでも発射できるよう電源が入り、地下に潜るように設置された入口は、僕たちを認めるかのように開かれていた。

僕はふと思いついてニナに訊ねてみた。

「ニナ、あの砲台で砲を撃つてられないの？」

「無駄よ。この電線は、砲台は砲身口徑がズカズカで砲弾がノーマルだし、弾に砲弾の威力がないから、あんまり強い銃に勝てないわ」

ならどうするのよ。車でも逃げられない。列車でも逃げ切れない。我々の自衛もない。八方塞がりだ。そのとき、さらに悪い事態が僕たちを襲った。

リニアール・カノンの乗道場に向かう車のエンジンが、突然切れたのだ。

「ちよつと、南無、何してんのけ」

「動かないのよ」南無さんが焦った様子でエンジンキーを回していた。だが車体にはなんの反動もない。「きつとさっき俺の上を踏おつたせいだね」

動力源を失った車体は慣性でそのまましばらく進み、やがて停止した。

南無からは、再び迫ってきている怪物の気配が聞こえてくる。間もなく姿が見えるところまで来るだろう。時間がない。

「とにかく列車まで走って」

僕は列車船までの道のりを確認した。道のりは少し複雑になっていて、機関車や上に列車船の乗降口が小さく見える。急いで走れば、十数秒で列車に滑り込めるのだ。確かにこれなら、車の両端を持つより走ったほうが早い。

僕は駆けやるように車を降りた。助手席のニイナも同じように降り、列車入口に向かって走り出す。

「早く来ないで置いててくわー」

僕に少し遅れて走り出したニイナが、あつという間に僕を追い抜いてく。さすがに機械の脚は速う。姿勢を低くし、後部座席の肉包のようなしなやかな動きで坂道を駆け上がった。

僕はそれを追うように、息を止めて走った。膝を腰におづけそうなのは全力疾走だ。

列車の乗降口に降り着いた。車内の壁にもたれて息をつく。ニイナは既に中に入り、操作盤を動かして脱動車庫をしていた。ひとまず危機は脱した。

僕は小と違和感を感じた。後からついて来ているはずの南無さんはどこだ？

そのとき、背後でエンジン音がした。

僕は驚いて振り返った。今、背後でエンジンの音が聞こえるはずがない。ニイナもそれに気づいて声をあげた。

「エンジン壊れたんやー」

車の運転席には南無さんがいた。右手は機銃が握られている。そんな小さな武器で、あの怪物を倒せるはずがないのだ。

「他に方法がないの。このままじゃ、列車が最高速になる前に城に追い付かれるから」

南無さんがすっと機銃を横に引いて微笑んだ。耳元の青いイヤリングが、陽光を反射してきらりと光った。

その笑顔で僕は気がついた。最初からエンジンは壊れていなかったのだ。

「国になるつもりけ」ニイナが車庫から身を乗り出して話ぶ。

「言ったでしよー。救世主が現れた時、私に何ができるかずっと考えてた。って、これが答え。神代君、君は救世主よ。私には分かるわ。だってカイルっていう名前は「永遠の機関」だもの」南無さんは遠い目をして、「お願い神代君、ニイナを守って。ニイナ……南無の継母するのよ」

南無さんはそう言うとき、エンジンを吹かせて車を加速させた。天候屋のほうに向かって加速していく。

「南無！」

ニイナが再び出すと同時に、周囲の空気を揺らした列車が自動でドアを開いた。僕は反動的にニイナを捕んで止めた。ニイナの成んの胸先でドアが強く閉じる。

列車内にもつれるように転がった僕たちを乗せて、リニアレールカーボンは壁かに浮き上がり、静かに動き始めた。

僕は急いで立ち上がり、天井近くに掲えられた小さな覗き眼に駆け寄った。

坂道の下、来た道を逆走していく南無さんの車。その向こうには直撃する巨獣の姿が見える。巨獣の腹が乗動車をとらえた。そして体をたわめ、自動車のほうに進行方向を変えた。怪物を避けたのだ。

南無さんは正しい。天候屋が強いを突きたなら、この列車が最高速度に達する絶妙の時間が得られる。僕たちは助かる。

彼が南無さんの車を咥っている間に、神代カイル君、きつとあなたは救世主よ。

南無だ？ 何故南無さんは国になった？ 僕を救世主だと信じたからなのか？ どうやって信じることができたんだ？ 機動車にも乗ることができないうのに……

床に膝を落としたニイナは動かない。足元として床に手をつき、うづむいてはる。

「ねぇ……神代、教えて」ニイナはゆっくり顔を上げて言った。「最後に南無は何て言った？」

ニイナの目には生気がない。僕はこちを向いているけど、僕を見てはいない。僕も似たような顔をしてるだろう。

僕は数秒沈黙した後、絞り出すように答えた。

「ニイナ、料理の練習するのよ」

その言葉が何かのスイッチを入れた。ニイナは突然ぱつと体を起こし、まるで火が入ったように列車を駆けだした。車内西壁に衝突付けられたタラップ

を駆け上がる。

「ニイナ行」

僕は思いどけを返った。下から風が吹込む、タラップの先は暗闇に照映した暗平面になっていた。二人掛けの狭い空間に、半透明のモニターがびっしり並んでいる。

僕が頭を出す、ニイナが操縦桿を手前に大きく倒して列車の速度を落としながら、機体の操作画面を呼び出しているところだった。

「ニイナ、それどうするのだ」

「あのアカネズミの尻に黒煙・加速砲をお見舞いする」ニイナは機械の指で黒煙・コンソールを叩きながら言った。「当たらんくても、あいつの加速を妨害からこつちに向けるくらいできるはず」

「けど黒煙さんが困ったのは、君でするためだ。奴がこっちに来たら——」

ニイナは僕の言葉を返すように壁を叩いた。そして全身から怒気をほとばしらせるようにして叫んだ。「誰を見捨ててる子供がどこにいたんだよ!!」

その気遣に僕は圧倒された。前に見えないニイナの意思が全身に叩き付けられた。

ニイナの瞳を見る。その目、強い意志をそなえた深青色の瞳に映い込まれそうになる。それで僕が心

が決まった。

「分かった、やあう」

僕は両手金に乗り、ニイナの隣に座った。大きな半透明のモニターに、山肌を駆け下りる敵の姿が映し出されていた。

「黒煙・加速砲は当たった、こつちからの黒煙信号で爆発するわ。それと砲身が重いせいで、狙撃みたいな重厚い加速は無理。奴がスコープの正面に来るのを待つしかないわ。まずは列車を加速させなきゃ。そつちの操縦桿をぜひに動かして、慣性走行に切り替えて」

僕は運転機前面にあった加速連レバーを手前に倒した。このくらいの操作なら僕でも見よう見まねでできる。僕は運転手に應じて、加速と発射はニイナに任せるしかない。

怪物はまさに両腕さんの重に懸いかかるうとしているところだった。けれどそのおかげで、進行方向を助けるのが容易になる。ニイナが敵と自動車の中間に加速をあめせた。

モニターに映る敵の姿が、中央の前進に重なる一瞬間。

「撃てっ!!」

爆音が轟き、黒煙・加速された列車が発射された。

完璧なタイミングだった。機体の加速電磁場が形成されるタイムラグ、黒煙砲を構えた重い弾頭が傾く山なりのカーブ通過、空気抵抗減速、すべてが完璧なタイミングの加速攻撃だった。

けど敵の行動は僕たちの予想のさらに上をいった。

こちらの脱出を読んだのだ。

ニイナが砲弾を発射する一瞬間、怪物の瞳が驚くようにこちらを見た。同時に機体の頭をバネのように曲めて体勢を低くし、その反動で進行方向とは真逆、後方に脱出した。生物にはありえないほどの屈反応だ。あるいは能力や能力に類かない、なにか別の感覚器官を備えているのかもしれない。そう考えなければ説明がつかないほどの瞬間的反応だった。

加速型をした加速弾頭は、空を切って山肌に突き刺さり、山肌に深くもぐりこんで停止した。

「呉れた……」

「こつちに気づきやがったわ!!」

ニイナの叫んだ通り、怪物が首をめぐらせてこちらを睨んだ。黒煙車が倒て、こちらの列車に攻撃能力があることを事知したのだ。

こちらは無遠慮のため、加速をやめて慣性走行









瓶の口が開くのが見えた。瓶りの長が始めを  
開かせている。

どうすればいい。残された時間はほとんどない。  
取れる行動もほとんどない。

自分が敵対者と戦ったことが、もし僕が世界を  
救う方である救世主なら、この状況を魔法のように  
解決できるだろう。けど僕はちっぽけな人間だっ  
た。どこにでもいる弱い人間だ。手元にあるカード  
で勝負するしかない。

誰だってそうだ。

「ニイナ、この瞬間は真上に向かって撃てろ？」と  
僕は訊いた。

「え？」ニイナは顔を歪められたように僕を見た。  
「確か、地対空の運用を考へてはば直上射撃が出来  
たはずだけど……あんなこんな時に何するつも  
う？」

「何かに頼まてー！」

僕は叫ぶと同時に、高度調整レバーを思いっぱい倒  
した。直上方向に。

とたんに機体の力が強いばかり、僕たちは機子  
の上を転がった。まるで重力が横向きになったみた  
いだ。車内のあるゆるものが横方向に弾かれるよう  
に転がっていった。僕は安全ベルトに掴まってその  
運動方向になんとか耐えた。

列車が机みたまてで急急に減速した。急走してい  
た機体の空が、一瞬モーターから消える。

もともと駅の攻撃で空んだ車体は走行抵抗が大き  
かったのだろ。至る所から金属板の折れる音きた  
てながら、列車は死の静寂のように静か。そして停  
止した。

僕とニイナはもつれた車糸のように駅平窓の隅に  
重なり合って倒れていた。

「ニイナ、会合したら真上に向けて一発撃つんだ」

「はあ、そんな事したらアンタ……」

「時間がない。早くー」

既に機体と地鳴りが聞こえてきていた。急停止し  
た列車を過ぎて、天候計が引き返してきたのだ。

僕とニイナは弾かれたように動き出した。僕は超  
平窓側面の「緊急脱出」と書かれた機体に向き付  
けられた、赤いハンドルを思い切り引いた。固定具  
が機体面とともに外れ、壁が外側に弾き飛ばされ  
る。人びとが通り抜けられるほどの出口が出現上  
がった。

出口の向こうの風景には、驚きだった牙軋。

「今だニイナー」

「どうなっても知らないわー」

やけっぱちめいた呼び声をあげて、ニイナが射撃  
トリガーを引いた。

真上に向けられた銃身が、天候計の機体にも負け  
ないほどの電磁波と弾薬を撃ちつけて機体をも上  
げた。一瞬風量計がオレンジ色に染まり、熱風が緊急  
出口から吹き込んだ。

「早くー」

僕は手を伸ばし、ニイナの手を握った。

僕とニイナは、ひとつの塊となって駅平窓から転  
がり落ちた。なかば地下に埋もれた列車体は、屋根上  
の機体平窓から逃げ落ちてもうコントロール可能な高さし  
かない。それでも整備された新コンタリの上に背中  
から落下して、僕の肺から空気がまともに送り出さ  
れた。



同時に機体が列車の底に吸いついた。

コンタリの機体から弾み強く巨大な壁が、列車底  
面を上昇から押し進めた。列車が宙を舞うみたいだ  
びくんと跳ねた。

「早く速くへー」

僕は立ち上がり、ニイナの腕を引いた。ニイナが  
機体の手足で機体から起き上がり、僕の体を助けて前  
方に飛出した。

巨獣の牙が、次々に列車体を噛み砕いていく。

最後、はるか天際から直下に落下してきた機体  
が、雷閃の速度で列車を貫通した！

駅トンネルの質量を持つであろう超長い弾頭が、磁石  
の電磁加速装置を破壊して列車を大爆に引き止め  
る。超電工本線ギアの電磁加速場を生成するための  
回路がショートし、調整用ニアレールを全線  
壊滅とい放棄が恒だ。

その青白い雷光の直後、列車に破壊された機体弾  
頭が高電圧電流が流れて誘導、遠距離を引寄せ  
こして列車の乗客が仕のように吹き上がった！

つづく

ギルドレ GUILDRE

# プロダクションノート

production note

「X-2バスター」 貞松龍彦

interceptor linear rail canon

# 迎撃「レール」カノン

フアットサブバスター

主に迎撃装置を主として製造された機。配属数は最も多い。

列車推進は電磁誘導（ローレンツ力）で加速し、最も速さは約40km/h。推進機はマジンガー、推進機、遠隔で制御する。



大型「車」の構造に倣って製造された。空気圧・熱輻射装置の列車。対空・対海・遠距離能力のある電磁加速列車「レールカノン」を備えている。



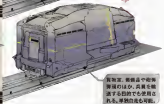
主に戦後10年の防衛に利用される。リニアの静電性を利用して、遠距離航行も可能。

X-2バスター

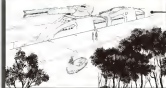


戦艦士の最終でバスターニングされたモデル。カテゴリー上の速度より何倍も速い。加速する。

ファットサブバスター



列車、戦艦や空母の迎撃のほか、兵器を破壊する目的でも使用される。早期警戒も可能。



列車の前進である軌道を守る目的と、敵列車を下げたため、列車はほぼ平地下に潜り込んで移動する。

戦艦、空母、戦艦、戦艦などの兵器をすべて破壊する。2人乗り。



列車はレールカノンの構造に倣って製造された。空気圧・熱輻射装置の列車。対空・対海・遠距離能力のある電磁加速列車「レールカノン」を備えている。